

令和7年度 明星小学校 校内研究

I 研究主題について

主体的な探究力の育成(第2ステージ・2年次)

～各教科の「探究過程」における児童の「考えを広げ・深める」ための学習活動の在り方～

(I) 主題設定の理由 ～昨年度までの実践から見えてきたこと～

本校では、コロナ禍、タブレット活用を推進する中で、知識・技能の習得に留まらず、思考力・判断力・表現力の育成を図るため、各教科でシンキングツール活用を進めた(第1ステージ)。教科の特質や発達段階に応じて、理由付けたり、順序付けたり、分類したりする際に、手際よく活用して追究活動ができるようになってきた。また、シンキングツール活用についてのおよその系統について整理できた。

ポストコロナの時代に入り、令和6年度から、目指す子ども像を「いつでもどこでもだれとでも探究する子」と掲げ、学校教育全体で育成を目指す資質・能力を「探究力」と据えた(第2ステージ)。情報活用能力、言語能力、問題発見・解決能力をバランスよく育成しようと、それらを統合したものである。

第2ステージにおいて、各教科の特質はあるものの、[課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現、評価・課題の更新]を目安とする探究的な学習過程を通して指導を行うこととした。教科や単元の特質により、1サイクル～複数サイクルがあることが想定できた。これらのプロセスを経て、児童が学び方として身に付けていく中で、各教科等で探究力を育成することができるのではないかと考えた。

また、1単位時間当たりの学習活動は、[①問いを立てる、②考えを広げる、③考えを深める、④まとめ・振り返る]を基本形として、各時間の目標をクリアしながら単元目標の達成に向かうこととした。

第2ステージを構想するに当たり、探究過程の具体を作るため、次の年次計画を想定した。

1年次:問いを立てる姿と手立てを明らかにする

2年次:考えを広げ・深める姿と手立てを明らかにする

3年次:まとめ・振り返る姿と手立てを明らかにする

1年次は、単元に1つまたは複数立てる「課題との出会い」の場面に焦点を当て、「子どもが課題意識を持つためには、目標に即してどんな教材を準備し、どのように課題との出会いをしたらよいか」について研究を進めた。

ここで混乱が生じた。1つは、私たちが明らかにしようとしているのは、単元の「課題の設定」か、単元末の探究過程の「問いを立てる」ところか。2つ目は、単元の全体が探究過程か、単元の終末が探究過程かである。

そこで、次のように整理した。単元の構成原理として、原則どの教科も[習得・活用・探究の過程]を基本と考え、単元の目標達成を習得・活用段階まで達成し、さらに個別の課題意識に応じて教科内容を補強したり、日常生活や実社会との関連を図ったりする過程を「探究過程」として位置付けることとし

た。つまり、単元全体を探究的に展開することと、単元における探究過程の位置付けを区別する。

その結果、各教科の提案授業を整理し、次のような各教科の単元末に位置付く探究過程における「課題の状況」と「課題の質」が明らかになってきた。また、課題の状況や課題の質が似ている教科や領域があることも明らかになってきた。

出合い	教科	課題の状況	課題の質
主に認識的なズレから	国語	既習の言葉の知識や技能を用いて、他の題材に応用できるような言語活動の中で	学習した言葉の知識や技能を活かし、説明したり、話し合ったり、発表を行ったりする課題
	算数	既習事項を用いて解けそうな応用発展的な数量図形の問題との出会いで	既習事項を組み合わせて数理的な問題を解く、ややハードルの高い課題
	社会	予想とは異なる資料や社会事象とのずれから	身近な事象で見出した仕組みや原理をもとに、複雑であったり隠れて見えにくかったりする事象の仕組みや原理を解き明かす課題
	理科	予想とは異なる自然事象とのずれから	
主にイメージのズレから	図工	友達の造形作品のよさや楽しい考えと出合って	目指す造形イメージに向けて表現と鑑賞、表現と技術習得を繰り返し、よりよいものを求める課題
	体育	より高度な運動技能やイメージを求めて	目指す動きの姿に向けて練習と振り返りを繰り返し、より高いレベルの技術の習得を目指す課題
	英語	他者との英語によるコミュニケーションや交流の振り返りをする中で	新たな視点でよりよいコミュニケーションを行う課題

第2ステージ2年目に当たる令和7年度は、探究過程の「考えを広げ・深める」場面を明らかにしようとしている。ここで、本校が求めたいのは、これまで習得・活用の過程で、一旦身に付いたと思われる時点から、中核的・本質的な内容から見てさらに深い理解を促し、一人ひとりの見方・考え方が深まるところまで、あるいは納得するところに到達させようということである。

本年度から本校は、文部科学省から教育課程特例校指定をいただいて、新教科「探究科」を創設した。探究科では、3つの領域を設けて、情報活用能力、言語能力、問題発見・解決能力を「探究力」と括りつつ、それぞれの資質・能力を重点的に身に付けるようにする。

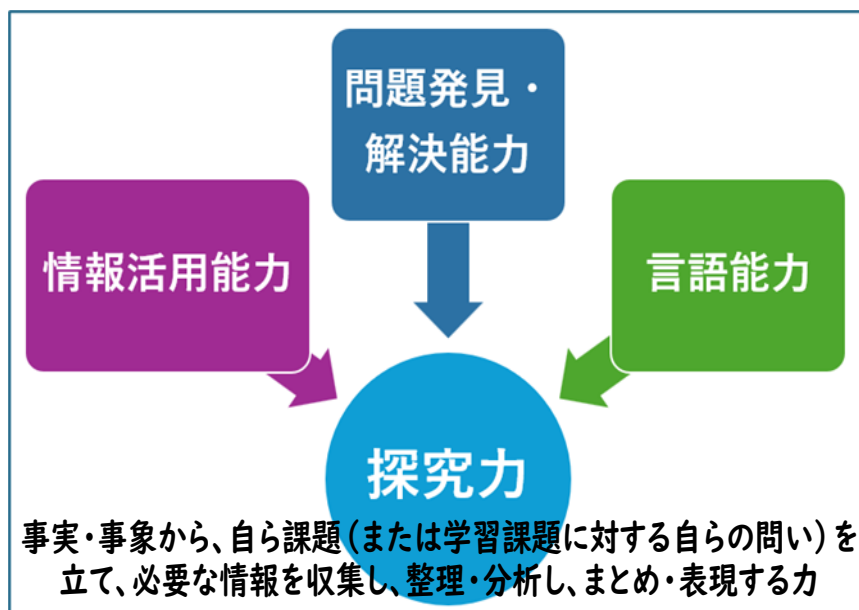
併せて各教科では、習得・活用の過程の後の単元末に、探究の過程を位置付け、教科の領域や学年を超えた学習内容を関連付けて問題解決をしたり、日常生活や実生活における問題を解決したり、より高いイメージに向けてスキルを上げる活動を行ったりする。

これらが、相互作用を起こし、より力強く個性的な探究力として育成できるのではと考えている。

(2) 主体的な探究力とは

現行学習指導要領総則には、学習の基盤となる資質・能力として①情報活用能力 ②言語能力 ③問題発見・解決能力の3つが例示され、本校では、それぞれ個別の具体的な内容を探究科の3つの領域で育成することを目指しつつ、これらを統合して「探究力」と捉え次のように整理している。

本校では、学校教育全体で育成を目指す資質・能力を「探究力」として、「事実・事象から、自ら課題（または学習課題に対する自らの問い）を立て、必要な情報を収集し、整理・分析し、まとめ・表現する力」と定義付けた。（R6.2）



さらに、探究力の育成に係る資質・能力 3 つの柱を以下のように設定した。

知識及び技能の習得	課題解決に必要な情報を集め、進んで知識や技能を身に付けることができる。
思考力、判断力、表現力の育成	ICT 等を駆使し、個性的・協働的に考え、情報を整理し、自分の考えを創造することができる。
学びに向かう力、人間性等の涵養	自他の考えを調整し、解決を目指して粘り強く協働して取り組もうとする。

児童の探究力をさらに育成するために、今年度本校では、以下の通り「教科の探究」と「探究科の探究」の両方を教育課程上に明確に位置付け、それぞれを充実させながら指導に当たることとした。

各教科の「探究」	探究科の「探究」
国語科の探究	探究A（コミュニケーション探究） ○言語能力育成 ○情報活用能力育成 現代的な諸課題をICT・本・資料を駆使・議論してまとめる
社会科の探究	探究B（グローバル探究） 問題発見・解決能力育成（協働的） 地域や学校の特色に応じた課題を地域の方・専門家と考える
算数科の探究	探究C（マイ・キャリア探究） ○問題発見・解決能力育成（個別的） 児童の興味・関心に沿った課題を長期休業中に論文・投稿する
理科の探究	
音楽科の探究	
図画工作科の・・・	
・・・科の・・・	

2 新教科「探究科」及び各教科の探究過程「探究〇〇」について

(1) 新教科「探究科」

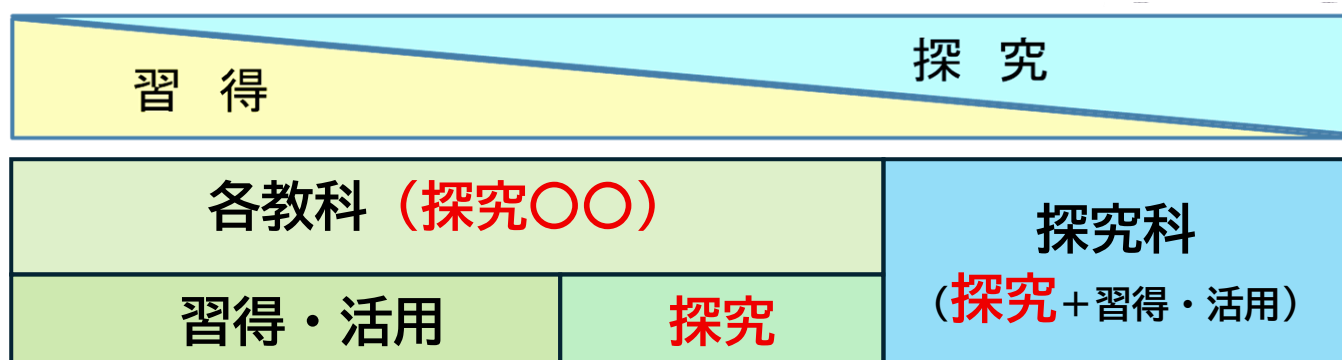
「探究科」は、文科省から教育課程特例校の指定を受け、R7年度に新設した本校独自の教科である。

内容としては、現行の「総合的な学習の時間」の枠組みに各教科の学習内容及び時数を一定数移行して加え、新たに名称を「探究科」とし、教育課程を組んだものである。本校独自の「探究科学習指導要領」も作成し、目標と内容、指導計画の作成も行った。（※ 別添資料参照）

探究科と従来の総合的な学習の時間の違いとしては、①第1学年から指導を行うこと ②指導内容に各教科の指導内容が明確に含まれていること（総合的な学習の時間は教科横断的） ③教科であるため他教科と同様に「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点で評価を行うことの3点である。

(2) 各教科の探究過程「探究〇〇」

各教科の指導では、探究力を育成するために単元の学習過程の「習得・活用・探究」の段階のうち「探究」の過程を特に注目して指導することとした。本校ではこのような単元を「探究〇〇」（〇〇には教科名が入る）を呼ぶことにした。



今年度はこの「探究〇〇」の学習内容や指導法を研究した。「探究〇〇」では、探究力の育成はもちろんだが、各教科における学習内容をより深め、高いレベルで確実に身に付けることを目的としている。

具体的には、各単元に配当されている時間のうち、ipadやグループ学習等を用いて「習得・活用」に当たる学習活動を効率的に短時間で進め、生み出された時間で「探究」に当たる学習活動を自律的・俯瞰的に進めることとした。また、探究〇〇は教科の探究であるため、原則、各教科の領域内や領域を超えた内容の関連付けなどに重点を置くこととした。

3 2年次の研究副主題について

各教科で、児童が主体的に探究を進めていくためには、学習の中で「考えを広げ・深める」活動は欠かせないとする。そこで、従来から1単位時間の授業構成は、〔めあて・見通し～まとめ・ふりかえり〕を基本としてきたが、特に単元の探究過程においては、「考えを広げる学習活動」と「考えを深める学習活動」を明確に位置付け、各教科の学習を展開していくこととした。

各教科の特質や学習内容に応じて、「深める」と「考える」と順番が逆になる場合や、1単位時間の中で「広げる」「深める」学習活動を複数回繰り返す場合などもあるとし、形骸化しないよう心がける。

(1) 「考えを広げる」とは

「考えを広げる」とは、「単元目標を達成し、超えるため、多様な考えを集め、個々の探究の視点を増やすこと」である。具体的には、「まずは自分の力でやってみる」（主体的な学び）ということ、例えば、自分のできることを見付ける、今までの学習を思い出す、使えるもの・ことはないか考える、知っている（できる）ことを組み合わせる、困った時は自分から他者に働きかける等の姿を想定している。

【探究〇〇の学習過程】

- 1 めあてから問いを立てる活動
- 2 広げる活動
- 3 深める活動
- 4 まとめ、振り返る活動

(2) 「考えを深める」とは

「考えを深める」とは、「単元目標を達成し、超えるため、学び合う中で、個々に広げた視点で知識と知識を関連させ、より概念として身に付けること」である。具体的には、「友達と一緒により良い考えを作り出す」（協働的な学び）ということ、例えば、友達の考えを分かり合う、自分の考えと比べてみる、みんなの考えを1つにまとめる、たくさんの意見を出し合う、よりよい考えを作り出すなどの姿を想定している。

4 研究の方法

右図の通り、全職員が分科会と教科部会に所属し、ペアまたはグループで相互研鑽（校内 OJT）を行い、授業改善や指導力向上を図ることができるよう意図的にグループ編成した。

(1) 研究授業

全員が年1回以上の公開授業（研究授業）を行い、部会のペアのうち、一人が10月の公開研（プレ私小連）で授業（外部への公開）、もう一人が分科会授業（分科会内で相互研修）のどちらかを行い、実践的に授業改善や指導力向上を図ることとした。

分科会	部会	メンバー（非常勤講師）	
A	国語	古椎	野中
	英語	小柳	スパイク（小野）
B	算数	恵藤	時枝
	体育	福原	阿部
C	社会	桑畑	上石
	探究（生活・総合）	柴田	牧野
D	理科	佐藤	草野
	音楽	小野	（太田）
	図工	岩野	（大鳥）

(2) 校内研修

教育最前線の文科省関係の方や、専門性や理論的に優れた大学の教授の先生方などから、幅広くまた、これからの学校教育に求められているものや具体的な実践事例から学ぶため、多くの講師の先生に直接またはオンラインにてご指導いただいた。また、探究科の単元づくりには、地域の温泉や諸活動に詳しい方にご参加いただいている。

	本研究に関わりご指導いただいた講師	ご指導いただいた内容
①	黒上 晴夫 教授(関西大学)	シンキングツール活用と思考スキル向上 探究的な学習と自己調整学習
②	久保 祐貴 教諭(明治北小学校)	総合的な学習の単元作りと単元一覧表
③	河野 麻沙美 准教授(上越教育大学)	探究的な学習
④	石田 有記 教授(日本体育大学)	探究科の創設に向けて
⑤	後藤 竜太 准教授(大分大学)	探究的な学習の単元作り
⑥	鈴木 美佐緒 講師(宮城教育大学)	生活科の探究・スタートカリキュラム
⑦	根本 裕美 准教授(白百合女子大学)	生活科の探究・学習活動・環境構成
⑧	齋藤 博伸 教科調査官(文部科学省)	生活科・総合的な学習の時間の探究
⑨	梶原 晃 ICT コンサルタント(ロイロ)	探究的な学習とロイロノート活用
⑩	後藤 善友 副学長(別府大学短期大学部)	理科の探究と、探究科の創設に向けて
⑪	古川 元視 教授(別府大学短期大学部)	図書館を使った探究学習
⑫	長谷川 剛 教諭(姫路市立白鷺小中学校)	探究科の単元作りに向けて
⑬	後藤 裕之 准教授(別府大学短期大学部)	体育科の探究
⑭	三宮 知恭 教授(別府大学短期大学部)	算数科の探究
⑮	三田 大樹 准教授(國學院大学)	地域の方と構想する探究科の単元づくり
⑯	登本 洋子 准教授(東京学芸大学)	探究科の探究と、教科における探究
⑰	田村 学 主任視学官(文部科学省)	探究と深い学び、中教審審議の動向
⑱	内海 真理子 教授(別府大学短期大学部)	国語科の探究

このほか、別府市ほか大分県内外でご活躍の多くの専門家の方に児童への直接指導や教材研究で本校の、探究的な学習の充実にご協力いただきました。

すべての皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。今後もよろしくお願いします。